

奈良文化財研究所平城宮跡資料館 特別企画展

# 地下の正倉院展——平城宮木簡の世界

# ごあいさつ

本年五月、平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡一七八五点が一括して国の重要文化財に指定されました。平城宮木簡の重文指定は二〇〇三年の大膳職推定地出土木簡三九点に次ぐものです。今回指定されたのは、一九六三年にSK八二〇というゴミ捨て穴からみつかった一群で、聖武天皇の内裏とその周辺の役所に関わるものです。

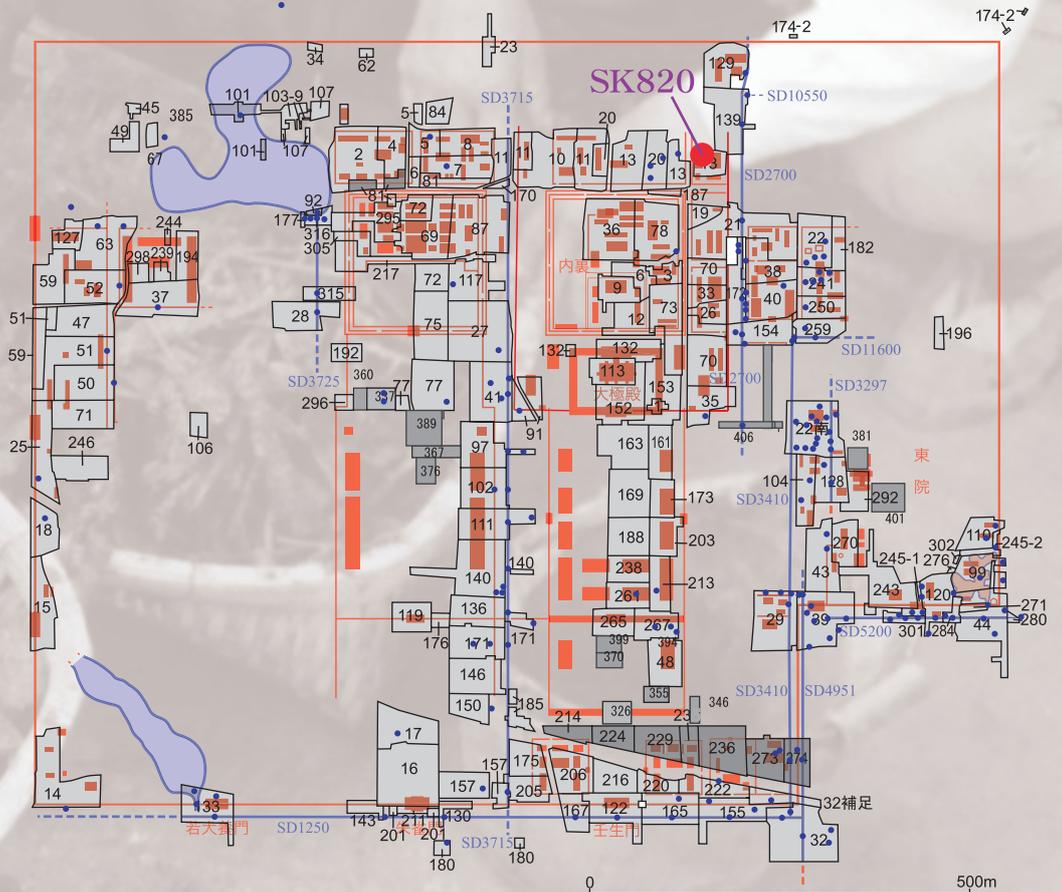
今回これを記念して、ふだんあまりみなさまにお目にかかる機会のない本物の木簡を、じっくりご覧いただく展示を企画しました。保存上の観点から、それぞれ二週間ずつという限られた期間ではありますが、「地下の正倉院」平城宮の真髄とも言えるべき天平の木簡たちを、さまざまな切り口からご紹介しますので、是非ご堪能いただければと思います。

終わりに、今回の展示の開催にあたっては、読売新聞大阪本社のご後援をいただきました。篤くお礼を申し上げます。

二〇〇七年一〇月

独立行政法人国立文化財機構  
奈良文化財研究所長

田辺 征夫



平城宮内の木簡出土地点とSK820の位置 (数字は調査次数)

## 例言

一、このリーフレットは、平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡の重要文化財指定を記念して奈良文化財研究所平城宮跡資料館で行う特別企画展「地下の正倉院展」平城宮木簡の世界」に因んで、編集したものである(会期一〇〇七年一〇月二三日(火)～二〇〇七年十一月二六日(日))。

二、木簡の保存に万全を期するため、会期中二週間ごとに三回の展示替えを行う。各期の展示期間と展示内容は左記の通りで、本書の構成もこれにならった。

- I 天皇の食膳 一〇月二三日(火)～十一月四日(日)
- II 宮廷の生活 十一月六日(火)～十一月八日(日)
- III 木簡の諸相 十一月二〇日(火)～十一月二二日(日)
- IV 宮城の守り 十二月四日(火)～十一月六日(日)

## 平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡

「地下の正倉院」とも称される歴史の宝庫平城宮。五〇年に及ぶ発掘調査によって徐々にその姿を現わしつつある。とりわけ、発掘調査で見つかる木簡は、「地下の正倉院」の精華であり、まさに「地下の正倉院文書」と呼ぶに相応しい。

内裏北外郭官衙のゴミ捨て穴SK820出土の木簡は、聖武天皇が五年ぶりに平城宮に戻った七四五（天平一七）年から七四七（天平一九）年頃使われたもの。都の東郊では大仏の造立が始まり、平城宮でもあちこちで槌音が響きわたる。内裏とその周辺の役所の改修工事に伴うゴミが、今回重要文化財に指定された木簡の源となった。

日本で千点を超える規模の木簡群が見つかったのはSK820が最初。一三〇〇年近くも昔に捨てられたたたくさんの木片が、腐りもせずこんなにも墨痕鮮やかなままに眠っていたとは！日本の本格的な木簡研究の黎明である。

木簡の整理・解説・科学的保存処理のノウハウは、SK820出土木簡によって築き上げられた。その意味で、この平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡は、日本の木簡研究の基礎を作った木簡群なのである。



上：SK820土層中の木屑層

下：SK820全景

背景：SK820遺物取り上げ状況



三、木簡の写真は、原寸の八〇パーセントに縮小して掲載した。なお、木簡写真下部の番号は、「平城宮木簡」での木簡番号である。

四、本書の編集は、企画調整部展示企画室の千田剛道の協力のもと、都城発掘調査部史料研究室が担当し、馬場基・渡辺晃宏が執筆した。木簡の写真は、企画調整部写真室の中村一郎の撮影による。

# I 天皇の食膳

全国からの様々な食材が、天皇の食膳を賑わした。「贄」とよばれる品々などがそれだと考えられる。輸送時に付けられた荷札が、あるいは宮中での保管や加工の際の付札が、豪華な食膳の様相を、鮮やかによみがえらせる。



466

## a 古代の乳製品

近江国からの生蘇の荷札。蘇は牛乳を煮詰めたもの。生蘇というから半固形だったろうか。貴重なためか、量も三合（約三〇〇cc）と少量で、それに対応するように小型の木簡である。

## b 山海の珍味

「贄」は律令に明確な規定がないが、天皇の食膳を支える重要なものであった。また、「中男作物」も、ほぼ同様な性格を持っていたらしい。

「贄」の荷札の中には、木材の加工方法も、書かれた文字もすばらしいものがしばしば見られる。荷物を送る側も、他の調や庸などとは、決定的に違うと意識していたわけである。右は、伊予国からの旧鯖（古鯖）の荷札。旧鯖が具体的にどのような品であったかは不明である。へしこのようなものであるか。文字も加工も丁寧である。

中央は、伯耆国からの腊の荷札。腊は干魚または干肉である。

左は、武蔵国からの鮓の背割りの荷札。背割りは、背中から割いて干したものとされる。



405



360



361



b

a



375

e



402

400

d



472

474

c

c 宮内に蓄えられた品々

平城宮の中では、食料の備蓄や加工が行われた。

右は、漬物を入れた瓶の付札。「天平十五年」と書かれ、漬け込んだ時期のメモだとすると、かなりの古漬けということになる。左は、「供御」とあり、天皇用の末醬の付札。

d 産地指定の新物ワカメ

奈良時代、ワカメは「海藻」と表記された。「若海藻」は、新物のワカメである。右は、下総国酢水浦からの荷札。左は、常陸国酒烈埼からの荷札。贅のワカメは、しばしば産地が記される。いわばブランドもののワカメである。

e 三河湾に浮かぶ天皇専用の島

三河湾の湾口付近に浮かぶ島は、月ごとに交替して海産物を貢進していた。奇数月が篠島、偶数月が析島（佐久島）である。「海部」は、古くからの伝統を伝える。

贄。全国から天皇の食膳に届けられた品々。サメやサケ、鹿やイノシシの肉など、数々の珍味が都に集められる。中でもワカメは各地から産地指定で貢進させていた。いわばブランドもので、「牟屋海」のワカメは、今なら鳴門のワカメ。

さて、贄といえは志摩国しまのくに。志摩の速贄はやにえというくらいだが、なぜか志摩国の贄の荷札はこれまで全然見つからなかった。しかし、どうやら郷の名前と品目だけ書いた小型の付札が、志摩国の贄の荷札の正体らしい。

産地指定の贄は確かに選りすぐり高級品だったのだろう。だが、天皇の日常の食膳を支えた品々には、案外粗末な荷札しかついていなかった。いや、もしかしたら、荷札など付けずに送られてきた品々も多かったのかも知れない。



かつて、この札たちは、正体不明のものとして扱われていた。繊維製品の色と名前だけ記しただけの小片。繊維製品に添えて利用された保管用のラベルでは、そんなふうに漠然と考えられていた。

近年の研究は、愉快な事実を明らかにした。これらは、何本かの細長い板切れを等分に切り折りして作られていて、仕上げも粗い。文字も一人で書いたらしい。何のために？

それは、どうやら「くじ引き」のためだったらしいのだ。ご褒美か、お裾分けか、はたまた宴会の余興か……。さて、くじに興じた天平人たち、お目当ての品は手に入ったのだろうか？



498~500

509 510

512 516 520号木簡と糸

## II 宮廷の生活

聖武天皇の住まう内裏だいりを支えたさまざまな役所とそこではたらく官人・女官たち。

正倉院宝物を彷彿とさせる天皇の身边から、彼・彼女らの日常業務と悲喜こもごもの生活まで、木簡の語る世界は広くかつ深い。



465

479



196

480

### a 「正倉院宝物」の落とし物

正倉院宝物は、かつて聖武天皇とともに平城宮内にあった。だから出土木簡には、「正倉院宝物の片割れ」がいることがある

火爐はひばち。お香の容器のラベルの木簡が一緒に見つかったので、香炉と考えたい。「御殿内」とあるから、あるいは聖武天皇愛用の内裏備え付けの品物かも知れない。とすれば、これらは東大寺の大仏に献納されて、香炉や櫃ひつとともに正倉院に残っていたとしても不思議ではない遺物。文字通りの「地下の正倉院」の木簡。

### b 女官の横顔

内裏には多くの女官も勤務する。左の「板野」は、阿波国板野郡出身の采女うねめ、板野命婦いたのののみょうぶ（粟凡直若子あわのなおしめたむこ）らしい。彼女のもとで働く女官真浜女まはまめに飯と塩を支給した帳簿木簡。宮廷の華やかな生活を支えた女官たちの食事も、下級役人や兵士たちと同様、飯と塩、そして菜っ葉程度のものであった。

ところで、聖武天皇の皇后光明子こうみょうしは、正式には内裏ではなく、当時は父藤原不比等ふひとの旧宅、現在の法華寺ほつげじの地に住まいしていた。



オールマイティーの札と考えた。写真  
 真は切断加工以前の  
 状態に復元したもの。  
 粗い加工がかえって  
 幸いし、復元の大き  
 な決め手になった。



**c 内裏を支える木簡**

西市は、平城京右京八条の公設市場。右はそこでの物品購入用の錢(和同開珎)のラベルの木簡。一定量の錢を紐を孔に通して束ね、この紐に木簡を括り付けた。千枚(一貫)一束の例もある。

左は、天皇用の紙を打つ(墨ののりがよくなるよう表面をたたき平滑にする)ため、三野部石嶋等呼び出した木簡。呼び出し元はずしより函書寮か。この木簡は彼らが函書寮に出向く際の本人証明にもなった。丈夫な木ならではの使い方だ。

**d くじ引き札をつくる**

ラベルにしては切り込みも孔もない。使用済みラベルをまとめて捨てるのか?書かれている色と製品名の組み合わせに同じ物がないのに、みんな同じ表情をしている……さらに、くじ引き札と考える決め手になったのは、「取色」と書かれた札。他の札と同じ規格で作られていることから、

# Ⅲ 木簡の諸相

一口に「木簡」といっても、実に様々だ。文字以外にも多くの情報がある。また、判読の難しい文字をどう読むか。木簡から、どれだけ多くの情報を引き出せるか。加工・文字・利用・廃棄と様々な角度から、観察と検討を繰り返している。



a 半裁された文書

図書寮という役所からの「解げ（下級の役所から上級の役所へ上申する文書」。半裁されていても、わずかに残った文字と、律令法や古文書こもんじょの知識を組み合わせることで、解読が可能となった。

b 様々な木簡

古代日本では、紙と木が、それぞれの特性や、文字を書く場面に応じて使い分けられた。

右は、横材木簡よこざい（木目を横方向にして利用した木簡）。横に長いいため、帳簿ちやうほとして便利。「板写公文」とも呼ばれ、紙と木をつなぐ重要な存在。

左はタグ状の札。荷物を保管する際に、その外に付けられていたと見られ、必要最小限の記載と、形態を生かした利用法は木簡に特徴的である。



226

b

469



342

d



461

312

c

#### c 付札と物品

右は紐が残っていた荷札。紐が残存する例は他にもあるが、いずれも植物の蔓。ただし、土中で腐りやすさの問題もあるため、必ずしもすべての紐が植物の蔓だったわけではないだろう。

左はアワビの付札。記載内容からは荷札木簡ではないが、木の加工は丁寧で贅荷札に極似する。贅荷札の再利用か、贅の荷の内側に付けられていた（外側は通常の贅の荷札）可能性などが考えられよう。木簡の利用形態を考える上で興味深い。

#### d 荷札と地域性

荷札にはいろいろな情報があるが、その一つに地域的特性がある。日本海側で杉材が多いが、これは植生とも関連するらしい。

伊豆の堅魚、安房・上総のアワビは、大型荷札木簡の代表。大きな荷物とお国柄のためだろうか。ちなみに、駿河の堅魚木簡は一回り小さい。

407号上部（表側から）



右は出雲の贅荷札。加工も丁寧で文字も良いが、切り込み部がめくれる。刃を入れた痕跡だ。最初に木簡の端側から刃をいれ、次に反対側から切り込んだ際、刃が届かず木が裂けたらしい。

右下の木簡でも、似た状況が観察できる。この場合、刃の入り方が一定でなかったようだ。しっかりと加工するのは厄介だ。最初から刃を合わせようなんてせずに、裂いてしまえ、というのが左下。ほどほどに刃を入れ、てこの原理でもぎ取ったのであろう。

木簡をよく観察すると、こうした加工時の様々な痕跡が—古代人の息吹が—見いだせるのである。

372号下部（表側から）



357号上部（裏側から）



SK八二〇は、天平一七(七四五)～一九(七四七)年頃に使われたゴミ穴である。当然、木簡の年紀もその頃のはずである。

しかし、約二十年ほど前の、神亀四(七二七)年の年紀を持つ木簡が出土している。若狭国の塩荷札である。なぜ古い木簡が出土するのか。

塩は腐らないから、と言われてきた。一方で、古代の法律は、にがり分の多い塩が湿気を吸って溶けることを指摘する。若狭に次いで出土点数の多い周防国の塩は、だいたい三年以内に消費されている。

形態や記載内容も含めて検討すると、若狭の塩は、どうも備蓄に適した加工をされていたらしい。塩という形で律令国家の実力の備蓄こそ、若狭の塩に期待されていたことであつた。



# IV 宮城の守り

宮廷での華やかな生活の隣には、それらを守る人々の姿があった。彼らを支える物資もまた、全国から集まっていた。SK八二〇出土木簡には、そうした人々に関わるものも多い。木簡は時に、彼らの生の言葉を伝えてくれることもある。



a 米塩べいえんのこと

奈良時代の基本史料、『続日本紀』は、「米塩の事」は煩わしいので省いた、という。だが、米と塩を支給しなければ、宮城の警護もできない。米と塩は、国家の実力を直接支えていた。『続日本紀』で省かれた米塩の事を、木簡は伝えてくれる。米や塩は重い。だから、都の近隣か水運の便の良い地域から貢納される。

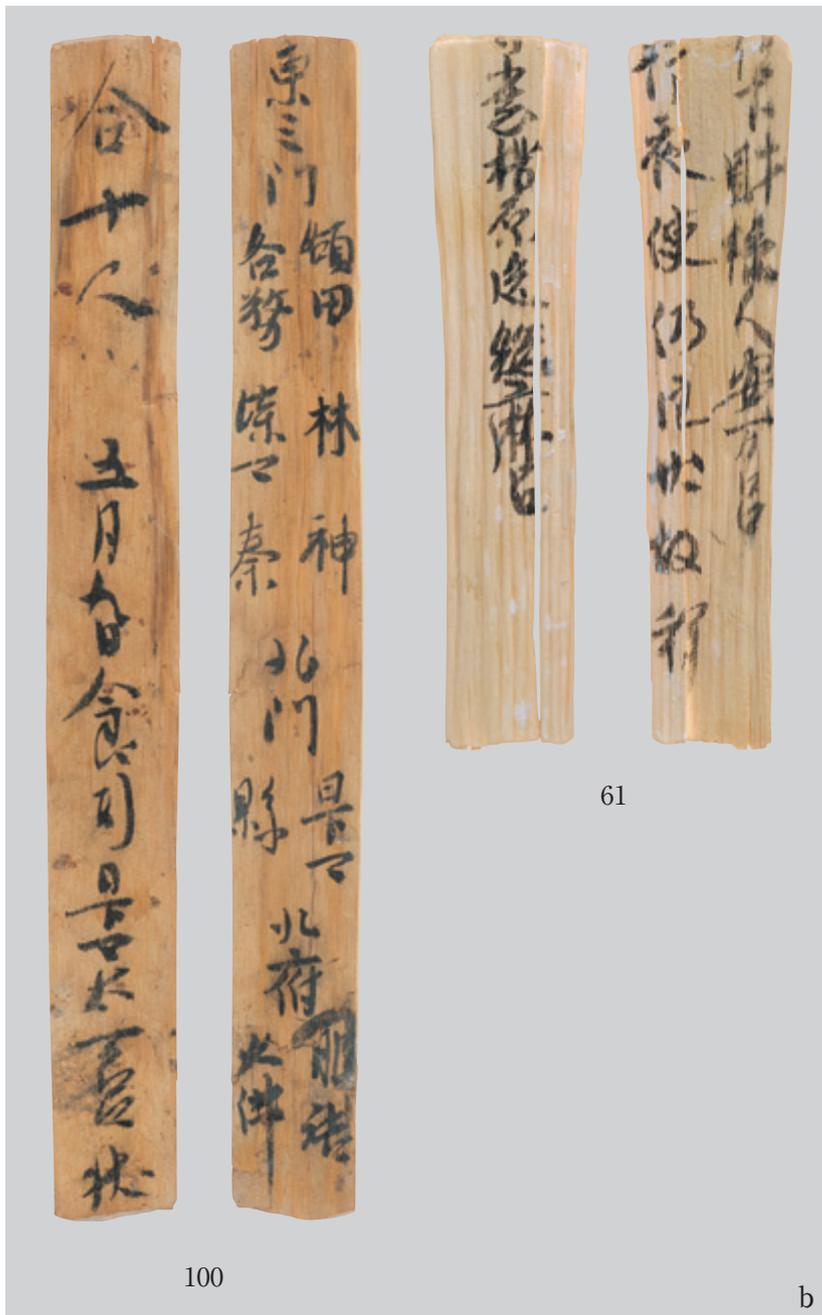
右は、備中国びつちゆうのくにからの、中央は阿波国あわのくにからの米の荷札。「白米」は、保管に適した種籾の状態ではなく、食用に適するよう精製した米。米は「五斗」「五斗八升」「六斗」単位のものが多い。「五斗八升」「六斗」は庸米ようまいで、一日二合の計算で、一人の一ヶ月分の食料に相当する。一方、五斗は俵に対応する。古代は五斗一俵が基本であった。なお、古代の斗量は現行の約四割程度の量である。

左は、周防国からの塩の荷札。塩は若狭国・周防国をはじめ、瀬戸内海・三河湾の沿岸諸国から貢進される。「尻塩きたし」は固形塩かたいし（大きなかたまりに固められた塩）。形状にはいくつかのパターンがあり、地域や塩の種類と関係すると考えられる。この形状は周防国ではめずらしい。



99

c



100

61

b

### b 警備部隊の配置

宮内の警備レベルは、大きく三つに分かれる。もつとも嚴重なのは内裏で、内裏の門は閤門とよばれ、兵衛が警備についた。兵衛は、中央下級官人の子弟や、地方郡司の子弟などからなる部隊で、身分上は官人の末端に連なる。

右は、夜間の見廻りを命じた木簡。平城京内は夜間外出禁止である。むろん、宮内も嚴重に警備されていたようである。

左は、門など守備すべき場所ごとに兵衛の配置を記した木簡。警備場所は、内裏周辺である。S K八二〇からは類似した木簡が多数出土し、その警備対象から「西宮兵衛木簡」と称される。西宮は聖武天皇の御所（内裏）のこと。裏面に「食司」とあり、食料支給のための伝票のような役割を果たしていたと考えられる。

### c 塩がない

西宮兵衛木簡のうちの一点。兵衛の名前に合点が記されており、実際に勤務したかどうかなど、何らかの照合がなされている。

注目されるのは裏面である。およその意味は「塩が来ていない。いつもどおりちゃんと用意してくれ」というようなことであろうか。食料支給の伝票として用いられ、支給現場で書き込まれて詰所に送り返されたのであろう。漢文としては不正確で文字も雑だが、逆に怒りが伝わってくる。

2007年10月23日

発 行

独立行政法人 国立文化財機構  
奈良文化財研究所

〒630-8577

奈良市二条町2-9-1

<http://www.nabunken.jp/>